特集にあたって

救急医療システム全体における始点は病院前医療活動ですが，医療機関にとっては「救急外来」が救急医療の入り口，出発点です。古くは，それぞれの医療機関・医師が，定期通院・非緊急受診患者の合い間に救急患者を診ていたわけですが，1950年代後半から，日本でも米国でも，救急医療専門の病院・院内部署が生まれました。50余年を経て，受け入れる重症度による施設基準の整備や，各医療機関における診療体制の構築はだいぶ安定したといえます。

とはいえ，時代背景や救急患者の増加，疾患や搬送システムの変化により，あるいは，救急医療への多職種の専門的参画により，救急外来の姿も変わっていきます。最先端をいく施設，改善したいがどう対応してよいか悩める施設など，置かれた状況により，管理者もそこで働く医師などのスタッフも，これでよいのかと思う場面もあるかと思います。そこで本特集では，救急外来の理想形を探り，抱えている問題点を振り返りながら，救急外来運営に必要な専門知識の色々な角度からの提供や，新しい取り組みに関する情報，スタッフの悩みに応える内容をご執筆いただきました。

多様な救急疾患の診療に追われながらも，救急医療システム，医療社会学の理解も求められる救急医・現場スタッフの方々のお役に立つことを願っています。

『救急医学』編集委員会